

クラーク首相(中央)とモーリーソン夫人、娘のキヤサリンちゃん(2才)。クラーク氏の40才誕生パーティーで。(A.P)



《新首相の横顔》

一〇ないし二〇パーセント、アルバータ州では二〇パーセント減った。西部カナダで選出された自由党議員は三名に過ぎない。これは新民党よりはるかに少ない。これは新民党支持をかなり前に決めていたに違いない。

一方、フランス系カナダ人は、複雑な政治的狀況に対して、本能的に全く違つた反応を示した。戦時を除く選挙においては、ケベック州がこれほど結束して一党を支持したことはかつてない。(もし今度の選挙で社会信用党の出馬がなかつたらば、自由党は徴兵が争点となつた一九一七年、一九二一年、一九四〇年の選挙より大きい支持を得たはずである。)しかも、自由党は、ニュー・フランスウイック、オンタリオ、マニトバ各州のすべてのフランス系選挙区で勝つたし、その他の地

ジョー・クラーク。三十九才。

カナダ史上最年少の首相が誕生した。

今年の一月、日本を訪問したこともある

クラーク氏は、本人が「ごく平均的な人

間」と認めるように、きわめて庶民的な

政治家だ。

生まれたのは、現在豊富な石油資源で

知られるアルバータ州のハイ・リバーと

いう、人口三千六百の小さな町。町の高

校で生徒会長をやつたというから、その

頃から政治には関心が高かつたのだろう。

父親は小さな週刊紙を発行していた。

一九五七年に進歩保守党のデイトン

ペーカー首相がハイ・リバーを訪問した。

彼はそのときから政治にまつかたという。

やがてアルバータ大学を卒業(歴史専

攻)。弁護士資格を得るため法学部を

カナダをぶち壊すことはあるまい、と考

えていたのである。国家統一については

深く感ずることがあつたのは間違いない

が、おそらく保守党支持をかなり前に決

めていたに違いない。

院で政治学の修士号を取得した。学生時

代は政治活動に熱心で、進歩保守党の全

国学生会委員長に選ばれたりしている。

十代から二十代にかけて、記者やその

他いろいろな仕事(アルバイト)をこな

から、心は政治にあつたとみえて、進歩

保守党候補者の運転手をしたり、選挙用

パンフレットを作つたり、演説原稿を書

いたりなどの下積みを重ねた。

クラーク氏が初めて選挙にうつてた

のは一九六七年。このときはアルバータ

州の議会議員に立候補したが、落選した。

そこで進歩保守党の州および連邦議員の

スタッフとしてさらに五年間働いたのち、

補し、みごと当選を果たした。

一九七四年に再選されたクラーク氏は、

一九七六年一月に開かれた党大会で、党

域でも、フランス語系住民が多い選挙区

はすべて抑えたようである。自由党票

の四三パーセント強はケベックで得たも

のだし、フランス語系カナダ人の票を合

計すると、おそらく自由党が獲得した票

の五割以上にはなるだろう。

大西洋沿岸の諸州では、自由党の得票

は減つたものの、議席数は変わらなかつ

た。全国的な傾向と反したのは、強い候

補者が立つたためである。同時に、貧し

い大西洋諸州がトルドー首相の石油価格

政策や地域開発および地域格差是正に対

する全般的支援から多大の利益を受けた

といふこともある。オンタリオ州では、

北部が南部の商業・金融・工業地帯と全

く対照的に完全に自由党についた。南部

オンタリオでも、自由党を支持した選挙

はあるまい。国際問題にうといクラーク

氏は、英連邦問題や国際関係における役

割を評価され、ときには影響力もあつた

前任者のトルドー氏に比べて、外交手腕

において劣るかも知れない。トルドー氏

は、発展途上国に対する援助の維持ある

いは増大、ガット交渉の成功にも力を尽

していた。少なくともすぐには大きな政

策転換があるとは考えられない。

ただ、民間部門の強化や、国営石油会

社、トロ・カナダの売却を提案したこと

に見られるような政府の企業経営からの

撤退を進めていくという彼の姿勢、天然

資源管理にからむ州の立場に対する彼の

強い支持を考慮すると、クラーク新首相

が主要貿易相手国に対する一次資源の輸

出を削減するということとは、まずあり得

ない。

夫人のモーリーソンさん(二十八才)は

弁護士。娘が一人いる。

映画。

趣味は読書(特に推理小説が好き)と

アの奨励などをあげている。

政府への移行、民間によるイニシアチ

費の増加、「大きな政府」から「小さな

減税、企業活動を刺激する優遇策、防衛

用するものと思われる。政策としては、

治を行うと述べており、内閣をフルに利

だが、選挙運動中、「合意」に基いた政

指導者としての力量はもろろん未知数

れている。

く評価されたのが、勝因のひとつといわ

れは、発展途上国に対する援助の維持ある

いは増大、ガット交渉の成功にも力を尽

していた。少なくともすぐには大きな政

策転換があるとは考えられない。

ただ、民間部門の強化や、国営石油会

社、トロ・カナダの売却を提案したこと

に見られるような政府の企業経営からの

撤退を進めていくという彼の姿勢、天然

資源管理にからむ州の立場に対する彼の

強い支持を考慮すると、クラーク新首相

が主要貿易相手国に対する一次資源の輸

出を削減するということとは、まずあり得

ない。